

## フランクルと滝沢克己

——人生の「意味」を巡って——

芝田豊彦

滝沢克己はフランクル (Viktor E. Frankl) を高く評価して、〈最近ドイツの神学と哲学〉で、「人間の心と体等々についての基本的な考えの深さ・明らかなさにおいて、ほとんどバルトやハイデッガーの壘を摩する」<sup>\*1</sup>ものがあると書いており、さらに〈フランクルのロゴセラピーとキリスト教の福音〉<sup>\*2</sup>と題してフランクル論を展開している。このフランクル論では、みずす書房刊の『夜と霧』におけるフランクルの基本的な考え方が、滝沢の考え方に「ほとんど同じと言っていいくらい近かった」とさえ言われている。

しかしながら、フランクルの著作に或る程度親しんでいる読者が滝沢のフランクル論を読む時に感じるのは、そこでフランクルの主張とされるものと実際のフランクルの主張との齟齬である。すくなくとも筆者はそのような思いを抱かざるを得なかった。したがって本論では、まずフランクルにおける「意味」の用法を概観したうえで、滝沢のフランクル論を検討し、さらに具体的にフランクルと滝沢の思想の類似点を見ていきたい。

フランクルによって提唱されたロゴセラピーにおけるロゴスとは、「意味」ということである。したがってロゴセラピーとは、意味に定位した心理療法ということになる。ロゴセラピーにおいて中心的な役割を担う「意味」という言葉は、フランクルによって三つの種類ないし三つの範疇で用いられているということに注意しなければならない。これを以下で順に見ていきたい。

まず第一の範疇は、具体的な個人において人生の具体的状況が持つ具体的な意味、すなわち状況意味という場合である。ロゴセラピーで取り扱われるのは主としてこの第一の範疇である。人間はその都度一度限りの比類のない状況に立たされるが、この状況は、そこに立つ人間に対して或る要求をするという要求的性格、場合によっては挑発的性格を有する。その要求に対して、人間は行為することによって答えるのである。人間存在とは、状況の要求に対して答えるという責任を持つ「責任存在」なのである。かくして或る状況に立つ人間はその状況の意味を知覚し、その意味——状況意味を満たすのである。人間の意味知覚は、或る意味でゲシュタルト心理学におけるゲシュタルト知覚に似ていると言える。ゲシュタルト知覚において、或る図がその背景のもとで知覚されると同じように、意味知覚においても、「現実を背景に、所与の状況をあれこれと形成する可能性が、目に飛び込んでくるとは言わないまでも、ひらめくのである。」(一〇二頁) フランクルによれば現実を変える人間の可能性が「意味<sup>\*</sup>」であり、人間は意味を満たすことによって、状況を変えることができるのである。かくして個人における人生の状況が、次から次へと移り行くのである。

具体的には次の三つの価値を実現することを通して、意味が満たされる。まず行為や創造、例えば芸術作品を創造することによって実現される価値は、「創造価値」と呼ばれる。次に人を愛したり、芸術作品を鑑賞したりすることによって実現される価値は、「体験価値」と呼ばれる。また場合によっては状況を変えることができない場合もあり得る。例えば不治の病にかかったような場合である。しかしそのような場合でも、我々の態度を変えることによって、すなわちどのような態度で苦しむかによって、この状況からも意味を見出すことができるのである。このようにして実現される第三の価値をフランクルは「態度価値」と呼び、上のふたつの価値より上位に置いている。意味は作り出すことも処方されることもできず、むしろ見出されなければならない。そしてフランクルによれば、どのような状況からも人間は意味——状況意味を見出すことができるのである。

フランクルは(ヘチエスの喩え<sup>\*</sup>)を用いることがあるが、滝沢も(将棋の喩え<sup>\*</sup>)を用いて人間の状況を説明する。神と人の根源的な関係が、将棋のルールという「根本的な約束」に対応する。しかしこの根本的な約束はかならず「特定の一つの局面(局面)」として現成する。逆に一々の局面(局面)は、根本的な約束なしに在ることはできず、両者の関係は不可分・不可同・不可逆の関係となる。そして「そのつとすでに決定された」特定の局面に即して、次の局面が、競技者によってほとんど無数の可能性の中から選ばれ、かくして局面が次から次へと移り行くのである。この選び方の「順逆精粗」が将棋の神さまによって「そのつと厳しく問われかつ審かれる」のであるから、この事態がフランクルの言う「責任」を生み出す。責任ある人間の決断によって、人間の状況も次から次へと移り行くのである。

第二の範疇は、「人生(生きること)の意味」と言われる場合である。この場合は、「具体的個人の人生の意味」である。これは上で述べた状況意味とどのような関係にあるのであろうか。ここでフラ

ンクルは〈映画の比喩〉<sup>\*</sup>を用いて類比的に説明する。映画は何千という個々のシーンから成り立つ。そして個々のシーンは観客にひとつの意味をもたらす。もし観客が個々のシーンの意味を了解しながら映画を見続ける時、上映の終わり頃になってやっと映画全体の意味が観客に分かり始めるのではないか。我々の人生にもこれと類比的に同じことがあてはまる。もちろん個々のシーンが人生の個々の状況に、映画全体の意味が人生の意味に対応する。かくして次のように言われる。「我々の人生の意味も同じように最後に初めて暴露されるのではないか。我々の人生のこのような最終意味も同じく、我々がまずすべての個々の状況の意味を最良の知と良心によって満たすかどうか、依存しているのではないか。」(二〇五頁) ここで言われているのは、人生の総体的意味は人生の最後においてしか知ることができず、しかもそれは個々の具体的意味を満たすことによってしか満たされ得ない、ということである。「人生の意味への問い」は多少とも形而上的な色彩を帯びざるを得ないが、それに対する答えはこの世界を越える必要はなく、謂わば世界内部的に答えられるのである。ロゴセラピーのプラグマティズム的で臨床的な性格が示されているであろう<sup>\*</sup>。

第三の範疇は、「世界全体の意味」である。「すべての人間の人生の意味」ないし「人生そのものの意味」もこの第三の範疇に入れることができるであろう<sup>\*</sup>。チエスの世界選手権者に、単に、それが最も良い指し手か、と問うことは無意味である。最良の指し手は、競技者と局面を特定して初めて決定することができるからである。それと同じように、「人生そのものの意味」あるいは「世界の意味」についての問いは無意味である。一般に「全体」(das Ganze)への問いそのものは無意味である、あるいは知的には答えることができない。なぜなら、「人生そのものの意味」に対する問いの場合は、万人にとって拘束的な人生の課題を取り扱うことは不可能であり、「世界の意味」とか「存在の意味」

への問いの場合は、人間の表象能力と把握能力を凌駕しているからである。このように「全体」の意味への問いは、形而上学的問いとならざるを得ない。

ここでフランクルは〈猿と血清の比喩〉<sup>\*</sup>を用いる。血清を作るために猿に注射するが、猿はその痛みないし苦しみの意味をけつして理解することはできない。猿には人間の意味の世界に近づくことができないからである。猿の場合と同じことが、類比的に人間にもあてはまらないであろうか。猿が人間の意味の世界に近づくことができないのと同じように、人間も人間の世界を越える「超・世界」には近づくことはできず、人間の苦しみに初めて意味を与えることのできる超世界の意味、すなわち「超・意味」を理解できないのである。このように超世界を想定すれば、人生ないし世界の究極の意味は超世界の意味、すなわち超意味となるのである。超世界、超意味は知的・理性的に、あるいは学問的に捉えることはできず、信仰の事柄となる。世界全体の意味(超意味)について知ることには確かに人間の意味の定位に対して深い形而上的な根拠を与えてくれるが、ロゴセラピーの主要関心事である具体的状況の意味を満たすことから人間を解放することはできないし、そういうことがあつてはならない。それ故にフランクルは、超意味への問いに対して拘束的な答えを与えたりせず、ましてや超意味への信仰に特定の宗派的規定を付与したりすることはないのである。このことからロゴセラピーは特定の世界観や宗教に対して中立の立場を取ることとなる。言い換えると、ロゴセラピーにとって宗教は重要な対象であるが、特定の宗教をロゴセラピーの拠って立つ立場にすることはない、ということである。実際、学問的研究成果によれば、人生に意味を見つめる能力は、その人が信仰的であるか、またどのような宗派を奉じているかには、原則的には依存していないのである<sup>\*</sup>。そしてロゴセラピーでは神信仰も意味信仰という視点で捉えられ、「宗教的な信仰は究極的には意味への信仰——超意味

への信頼である」(七五頁)と言われるのである。

滝沢神学によれば、信・不信にかかわらず、人間は存在する限りにおいて神人の根源的規定に服さざるを得ない。ロゴセラピーが宗教を立場にしないということは、滝沢神学でのこの事態に対応するであろう。しかし超意味への決断は知的なものではないが、知性に反するものでもない。それはむしろ実存的な決断である。かくしてフランクルによれば、「信仰とは、考えられたものの実在性を減じられた思惟ではなく、考える者の実存性を増した思惟(Danken)である」(一〇九頁)とされる。滝沢の場合も、「信仰」は、知性の犠牲を犯して信することなどではなく、「私たち人間がそれを好むと好まざると、認めると認めないにかかわらず、事実厳としてあることを在るとするにすぎない」のであり、「非合理・反理性的であるどころか、そこにいささかの酔いも気負いもないという意味で、それは最も理性的・合理的な思惟<sup>\*1)</sup>」なのであった。このように滝沢においても、フランクルにおいても、信仰は単なる理性的思惟とは区別された高次の思惟と見なされているのである。

## 二

滝沢は彼のフランクル論で次のように言っている。「フランクルのいう『意味』の中で第一の意味は決して主観的な状態や思想や情緒ではなくて、客観的なものであり、人の思いに全く先立つて人に与えられており、そのつと与えられてくるものであって、人間の意志からは全然独立なものであった。」したがってフランクルにおける第一義的な「意味」は超越的な意味とされる。「だから人間の内部の意味を意味というならば、ほんとうの生命の意味・第一義的な意味は全く超越的な意味といわなければ

ならない。」ここで「人間の内部の意味」とは、創造・体験・態度価値として実現されるような意味と考えられている。以上の滝沢の主張は、滝沢神学を「意味」という言葉で書き直したものと見なすことさえできるであろう。ただフランクルの意味の用法には三つの範疇があり、「超意味」という言葉は第三の範疇に属し、「世界全体の意味」との関連で用いられていたのである。ところが上の滝沢の主張においては、意味の用法に三つの範疇があることは一切考慮されていないのである。フランクルが「超意味」という言葉を用いたのは、第三の範疇が本質的に宗教的・形而上学の問題と関わり、超越という言葉にふさわしい領域であったからであろう。それではフランクルにおいて、第一の範疇に属する具体的な状況意味は超越的次元に関わらないのであろうか。

具体的な状況に見出すことができるというのは、我々も認めることができる。しかしそこから、「どんな具体的な状況にもかならず意味がある」と主張することには、いささか論理の飛躍があると言わざるを得ない。この主張は学問の限界を越えた主張であり、何らかの超越的次元との関わりなしでは主張することができないのである。このことは特に態度価値についてあてはまる。苦しみにも意味があるということは、超越的次元との関わりなしでは言うことができない。滝沢神学的視点から見れば、その状況に在る人間と神との根源的關係からのみ、その状況の具体的意味も生じるのである。したがってどんな具体的な状況にもかならず意味があるということも、本来は、そのような神と人との根源的關係との関わりにおいてしか言い得ないのである。それ故にフランクルにおいて、状況意味も超越的次元との関わりを暗黙のうちに前提していると言わなければならない。ただそのことが明言されていないだけである。

しかし、そもそも「意味」とか「価値」は学問に内在的な概念ではあり得ない。このことはフラン

クルもよく承知しており、彼にとって「意味」は一種の限界概念となる。「意味とは、我々がそれ以上その背後に後退できない壁であり、我々がむしろ受け入れざるを得ない壁である。この究極的な意味を我々が仮定せざるを得ないのは、我々がその背後に問い返すことができないからであり、しかも存在の意味への問いに答える試みにおいて、意味の存在がいつもすでに前提されているからである。要するに、人間の意味信仰は、カントの意味における超越論的範疇である。∴人間は欲しようと思まいと、認めようと認めまいと、人間は息をする限り或る意味を信じているのである。自殺者も、たとえ生きるとか、生き続けるとかいう意味ではなくても、死ぬという意味を信じているのである。」(七三―四頁)

上の引用で「究極的な意味」とは、「存在の意味」とか「人生そのものの意味」のことであろう。それでは引用中の「死ぬことの意味」とは、状況意味という観点からはどういうことを言うのであろうか。フランクルにとって、状況という現実を変える可能性が「意味」であった。状況を変えるためには死ぬしないと判断した場合、その人にとっては「死ぬこと」が「意味」になる。「死ぬことの意味」とはそういうことであろう。フランクルにとって「生きる」ということは、自殺という行為も含め、「意味を信じる」ということなのであった。何故そうなのかを尋ねることも我々には原理的にできないが故に、「意味信仰」が生を超越論的範疇と言われるのである。ところで「人生の意味への問い」とは、我々の知を越えた問いであるから、無意味な問いである。それにもかかわらず、人間は生きている限り「人生の意味への問い」を立てざるを得ず、なんらかの仕方でも——たとえ無意識的であれ——「人生の意味」を信じているのである。「意味信仰」が生を超越論的範疇とはそういうことである。

もしカント的な超越論的範疇という説明原理を使わないならば、「人生の意味」は超越的次元の方から我々に与えられている、と表現せざるを得ない。「人生の意味」のみならず、人生を構成するものもろの状況の意味も、すでに述べたように、超越的次元と関連しているのである。滝沢のフランクル論は、たしかに意味の三つの範疇を考慮に入れておらず、フランクルの「意味」の用法からずれているのであるが、それにもかかわらずきわめて的確な主張と言わなければならない。我々は滝沢の主張を受けて、フランクルにおいて超意味という超越的視点が第三の範疇の意味に制限されていることを、フランクルの意味の思想の不徹底として示さなければならないのである。

さてフランクルがロゴセラピーの仕事や宗教の仕事から区別していることに、滝沢は批判的に言及している。このことは、フランクルと滝沢の共通点、すなわち、一方で信・不信を問わずと言いつつ、他方で信仰を高次の思惟とするふたりの共通点を見てきた我々にとっては意外とも思われるのである。しかしこの滝沢の批判的言及も、じつは、「超人間的次元と人間的次元は区別されながら一つであり、一つでありながら区別されているという弁証法的関係——この点がフランクルでは十分よく見きわめられていない」という点に基づいていることを我々は見落としてはならない。滝沢のフランクル批判はじつにこの点に極まる。またヌルメラ(R. Numela)は、フランクルにおける「意味と超意味の理念」が、必ずしも首尾一貫しておらず、間隙を持っていると批判している。<sup>\*)</sup>ヌルメラの極端な例では、フランクルの意味の思想に従えば、強制収容所のガス室の看守の仕事も意味あるものになりかねない。このようなフランクルの意味の思想の間隙も、結局は、神と人の弁証法的関係が十分見きわめられていないことに起因すると言わなければならない。

滝沢とフランクルの思想の類似をさらに具体的に見ていきたい。有限の人ないし物が神人の原関係（「インマヌエルの原事実」を「映す」とは滝沢がよく用いる西田哲学的な表現である。この「映す」という概念に類似しているのが、フランクルにおける「射影」とか「写し取る」(abbilden)という概念であろう。フランクルは〈垂直面上の曲線が水平面で切られる比喩〉<sup>\*15</sup>を用いる。垂直面上の曲線が水平面で切られて、とびとびの五つの孤立した点を水平な切断面に残す場合を考えよう。垂直面上では五つの点は曲線によって結び付けられているが、水平な切断面では孤立した点となる。同じように、意味ある関連も切断面に写し取られることによってその関連性が見失われることがある。例えば、見かけは意味のない「突然変異」という現象も、自然科学という切断面に切られることによって発現した偶然として理解できるのである。この場合も上の比喩と同じように、「その背後に潜む、或はそれを越える意味」を我々は信じていることが許されるのである。自然科学の世界観はあくまで因果律的であり、「自然科学的な射影平面においては、目的論は写し取られることはない」（一〇七頁）からである。フランクルの「射影」理論においては、自然科学における事象は、その背後に潜む、或はそれを越える「意味」を予感させる。滝沢においては、有限の個物が、あくまで「徴」として、「インマヌエルの原事実」を映すのである。ところで興味深いことに、滝沢も〈純粹神人学草稿〉で「突然変異」に言及している。そこでは、自然の歴史的形態はインマヌエルの原事実「決定的に規定された事実」であり、そうであるからこそこの形態（事象）は、「つねに新しく独特な仕方で自己を規定できる」と言われている。そしてこの事態にこそ、「いわゆる生物学的『突然変異』の可能性の根拠もあるのではなからうか」<sup>\*16</sup>

と言われるのである。滝沢は、突然変異の可能性の究極的根拠を、〈原事実による決定的な規定〉に見ているわけである。共に超越的次元との関わりによって突然変異を説明しようとしているが、フランクルの「意味」的見方が静的であるのに対して、滝沢の「原事実」に即する「場所的論理」的な見方はより動的である、と言えようか。

さてどのような状況にあっても「人生に意味を見つけ、意味を満たす」ことができるフランクルは主張しているのであるが、すでに述べたように、このことは学問的に証明できるようなことではない。とはいえ、理解不能なことというのでもない。むしろ、文明社会がいかに無意味感を吹き込もうとしても、上の主張は、通りにいる普通の男（der Mann von der Straße）や女が直観的に知っていることなのである。すなわち上の主張は、人間の「前・反省的で存在論的な（自己と意味についての理解）」（一〇二頁）と一致しているのである。このいささか生硬な表現で言わんとしていることを、分かりやすく言い換えれば次のようになるであろうか。人間は存在する限り、その人生には必ず意味があるということ、人間は反省する以前にすでに知っている、ということなのである。この前・反省的で存在論的な理解を、価値判断を加えることなく現象学的に分析していけば、意味を見つけて満たす仕方が分かるのである。滝沢にとっても、インマヌエルの原事実は、感覚的に見ることも、知的に根拠づけることもできないが、人間である限り直覚可能な事実なのであった。そしていかなる歴史的・特殊の形態も内に含むことなく、あるがままに原事実を指し示す試みが、原事実のエコーとしての純粹神人学に他ならなかったのである。<sup>\*17</sup>

フランクルは興味深い神の定義——「神とは我々の親密な自己対話の相手である」（一一四頁）と——という操作的な神の定義を挙げる。この神の定義から、フランクルは話題をさらに無神論者の神信仰へ

移していく。そして「根底において、無意識の深みにおいて、本来は我々の誰もが語の最も広い意味において〔神〕信仰的である」(二二五頁)という謂わば「信仰の遍在」(同上)が主張される。フランクルによれば、人間は生きる限り何らかの仕方で(超越的な)意味を信じているのであり、そうである限り、無神論者を含めすべての人が神信仰を持つと見なされるのは、必然的な帰結と言ってよいであろう。さて滝沢であるが、インマヌエルの原事実<sup>\*18</sup>は、すべての人に、いや極悪人のもとにも「一厘一毛の緩みなく臨在している」<sup>\*19</sup>のであった。インマヌエルの原事実の絶対平等性である。「信仰の遍在」とは、原事実に対する人間の無意識における感応として理解できるであろう。このようにフランクルの「意味」と滝沢の「原事実」は限りなく共鳴しあうのである。

## 文献

- ① 『滝沢克己』著作集第七巻』法蔵館
  - ② 滝沢克己『現代の医療と宗教』創言社
  - ③ 滝沢克己『純粹神人学序説』創言社
  - ④ R. Numela, *Die innere Freiheit. Das jüdische Element bei V. E. Frankl, Frankfurt a. M. 2001.*
  - ⑤ A. Bathyaný, *Logotherapie und Religion. In: V. E. Frankl u. P. Lapide: Gottesuche und Sinnfrage, Gütersloh 2005, S.36-44.*
  - ⑥ K. Biller u. a.: *Wörterbuch der Logotherapie und Existenzanalyse von V. E. Frankl, Wien 2008.*
  - ⑦ V. E. Frankl: *Der unbewusste Gott, München (Kösel) 1991.*
- フランクルについては、著作全体を参照したが、引用はこの著作に限定し、本文中で頁数のみを示した。

## 注

- \* 1 『第七巻』四二八頁
- \* 2 『第七巻』四三二―四四頁
- \* 3 Biller S.404
- \* 4 Biller S.436
- \* 5 『医療と宗教』六六―七頁
- \* 6 Frankl S.105
- \* 7 Bathyaný S.41
- \* 8 Biller S.433f.
- \* 9 Biller S.433
- \* 10 Frankl S.105f.
- \* 11 Bathyaný S.42f.
- \* 12 Frankl S.102
- \* 13 『第七巻』二二―三頁
- \* 14 Numela S.55
- \* 15 Frankl S.107f.
- \* 16 『神人学』二八〇頁
- \* 17 『神人学』二七五頁他
- \* 18 Numela S.54

